



## 読書の季節に分析化学を想うということ

同志社大学の橋本先生からバトンを引き継ぎました長崎大学の岸川と申します。橋本先生はリレーエッセイでホタルの話をされると伺っております。この原稿を書いている時期がちょうど7月なのでホタル鑑賞に適した時期ではありますが、蛍光・化学発光分析法を主な研究テーマとする私のもっぱら試験管の中のホタルの光を観察するばかりで、なかなか本物のホタルを目にすることができていないのは非常に残念です。

さて、夏に執筆中のこのエッセイの「ぶんせき」への掲載は11月に予定されており、季節はすっかり秋になっていると思います。秋といえば、スポーツの秋や芸術の秋など様々な言葉が冠されて語られますが、私にとっては読書の秋がもっとも身近な秋になります。そんな読書の秋にちなんで、今回のリレーエッセイはあるミステリー小説にちなんだタイトルでお送りしております。数少ない私の趣味の一つに読書があり、書店で適当な小説を買っては読むという生活を学生時代から相変わらず続けております。昔読んだ本を後になって読み返すと新たな発見をすることがあるように、本に対する印象や注目点はそのときの心境や環境とともに変化していきます。分析化学に携わってある程度の時間が経過した最近では、物語の中に登場する分析法に注目することが多くなりました。分析化学といえばその応用範囲の広さによるものでしょうか、推理小説、医療小説やSFといった様々な分野で関連のある描写を目にします。しかし、中には「おや？」と首をかしげたくくなるような分析法に遭遇することもあります。ネタバレにならない程度に例を挙げて紹介しますと、最近映画化もされたあるミステリー小説の中で、中学生が血液に反応する試薬を使って牛乳から血液の検出を試みるという場面が出てきます。中学生が入手可能な試薬で血液を検出するとなるとルミノール化学発光法が思い浮かびますが、牛乳のような多様な成分が存在する試料の中から血液を検出することはルミノール法では事実上不可能ではないかと私は気になりました。とはいっても、分析法が不適切であるという疑問は、物語の進行には影響を与えておらず、その面白さを損なうものではありません。この原稿を書くにあたってその小説を再読したのですが、初読時と同じように物語に引き込まれました。幽霊や超能力者が出てくるような科学的にはあり得ない小説を楽しんで読むこともあるのですから、分析法の細かい点を気にして物語の本当の面白さを印象に残さないのでは、あまり意味があり

ません。研究者に必要なクリティカルシンキングも物語を楽しむときには不要であるのかもしれませんが。一方、並行世界の日本を舞台にしたあるSF小説では血液中のヒスタミンを蛍光標識抗体により測定するという場面が出てきます。こちらは、ヒスタミンのガラスへの吸着を防ぐために測定にはプラスチック器具を用いることや抗凝血のためにチューブにEDTAを入れておくなど操作法が詳細に記述しており、ただ単に「血液中ヒスタミン濃度を測定した」という一文で描写するよりも説得力を感じます。小説というものは、様々な分野の専門家がその読者となります。そんな中、多くの読者が納得するだけの描写をするためには、文章力はもちろんのこと歴史や科学といった広い範囲の知識が要求され、そのための情報収集のたいへんさは論文検索以上かと思われます。

翻って、私自身もエンターテインメント性は極めて薄いながらも学術論文という物語の書き手と考えられます。私の物語にも読者によっては首をかしげたくくなるような場面が存在しているかもしれません。例えば、私が得意とはしていない化合物の合成法や反応機構に関しては、その分野の専門家から見ると不適切に感じられる点があることでしょうか。逆に、私自身も分析化学分野以外の論文で用いられている分析手法に疑問点を持つことはあります。多くの読者を納得させることができる論文を書くためには、作家の方々を見習ってより広範囲の分野の知識を身につける必要がある、と綿密な調査を基に書き上げられた小説を読んだときにはそんな考えが浮かびます。様々なジャンルの小説を読むことによって、海外文化、法律や経済など私がよく知らない世界に少し触れることができます。今後、そのような知識が新たな研究のアイデアに結びつくことがあるかもしれません。最近読んだ本に、読書という行為は数年にわたる出来事を数時間で体験できるという記述があり、なかなか面白い考え方だとは思いました。しかしながら、一生のうちに読める本はこれまでに生み出されてきた物語のほんの一部にしか過ぎません。良い物語に出会い、心をリフレッシュさせるとともに何らかの新たなひらめきの種を得ることができればよいなと考えています。

リレーエッセイ、今回は星薬科大学の伊藤里恵先生にバトンの引き継ぎをお願い致しました。何についても積極的な伊藤先生から、どんな話題が飛び出すか楽しみです。伊藤先生、ご健筆期待しております。

〔長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 岸川直哉〕